

子どもと笑い(1)

—生活にもっと笑いやユーモアを—

今井 和子

子どもの笑いが弱くなっている？

離婚や失業などが急増し大人の生活が脅かされると、その余波がたちまち子どもたちにもふりかかり、今、子どもたちの笑顔や笑いがとても少なくなっているように思えてならない。笑いは、人の心と心が触れあうこと、つまり人とのコミュニケーションを生み出す最も有効な手段である。笑いは、言葉と異なり民族や文化の違いがあつ

ても誰とも通じ合える人間の生得的な機能でもある。

乳児においては、自分の世話をしてくれる母親との関わりがうまく成立せず、泣いて要求を訴えることすらしなくなったサイレントベビーの出現が浮き彫りになり十数年が経過した。この間、子どもの育つ環境はますます悪化している。育児の伝承がなされないまま母親になり、子育ての仕方がわからず、泣く子を前におろおろしてしまう母親。わからないことを誰にも相談できず不安

が募るばかりの孤独な母親、そのために生じるストレスが乳幼児に与える影響は測り知れない。一方、情報機器（テレビやビデオ、テレビゲームなど）による過剰な刺激、雑多な情報が乳幼児に送り込まれ、子どもたちは大脳疲労を起こし、人のことばを心に刻み込むスペースも失っていると本で読んだ。さらに共働きの親たちは、長時間労働や時間に追われるハードな生活のためゆとりを失い、ついつい子どもを追いたててしまう傾向にある。親がわが子と一緒に暮らすことに楽しみや喜びを見出せない状況を生み、子どもの表情が硬くなっていることは、子どもからの緊急を要するSOSではないだろうか。

大人と子どもの豊かな人間関係を回復するために

お母さんや周りの大人から豊かな愛情を注がれた子は「愛される喜び」を実感し快活に育っていくことはいくらでもない。ほおずりをしてもらい、抱きあげられ、

「いないいないばあ」で笑いあい、大好きな母親の印象を体に刻み込む。そして、日頃の快感や喜び、笑いの源が、いつも「お母さん」なのだと思いつくようになる。その、子どもの笑顔こそ、親や保育に携わる者の宝、生きる力の支えではなかったか？

大人と子どもの関係は、大人が一方的に子どもに影響を与えるのではなく、大人も子どもからことばに尽くせない喜びや力を与えられているはずである。子どもとのやりとりを楽しむことにこそ育児や保育の本質があることは昔も今も変わるはずがない。大人と子どもの信頼関係を回復するため、まずは「笑うことで楽しくなる生活」を始めよう。子どもと一日一回にらめっこすることもいい。大人が子どもに向きあえば、子どもは必ず笑い出す。子どもの未来は、笑いからスタートするのだから。子どもは小さいことを大きく喜ぶ、天性の楽道家ではなかったか？そして嬉しいことがあるとその喜びや楽しさをもっと増幅しようとふざけたり、おどけたりして

笑いを広げる。ところが、大人の機嫌が悪かったり、ゆとりがないと、「なに馬鹿なことやってるの!」「ふざけるんじゃない!」ともみ消されてしまう。笑いやユーモアは、それをおかしいと理解する相手があつて成立する。子どものユーモアやふざけをどれほど楽しみ共に笑えるかが大人の心身の健康のパロメーターではないだろうか。

楽天的な生き方を子どものことばに見出す

私は二十数年間、保育所で子どもたちと暮らし、子どものことばに散りばめられたおかしさやたくさんのナンセンスを楽しませてもらった。

四歳ののり子ちゃん。朝登園すると嬉しそうにこう言った。「先生、のり子、赤ちゃんの時、なめくじだったの」「えっ、そんなはずはないでしょ」と私が何度訊いてもなめくじなんだと言いはった。そこで夕方、お母

さんが迎えに来たので確かめてみると……じつは、朝、のり子ちゃんが生まれた時のアルバムを書棚から引っ張り出して見ていたので、お母さんが「のり子は、赤ちゃんの時、未熟児だったのよ」と話したが何のことやらわけがわからなかった様子。「未熟児・すなわちなめくじ」と思い込んでしまったのである。私たちが顔を見合わせて大笑いすると、何を笑ったのかわからないのに、のり子ちゃんも一緒になって笑い出した。笑いはまちがいない、人に伝染する。共に笑うことで『この人たちと一緒にいるって楽しい』という幸福感を味わうことができる。

四歳児のクラスの子どもたちと散歩に出かけた時のこと、前方から歩いてくる細身のおばさんを見たとも子ちゃん、「あのおばあさんおなかが大きいね」とつぶやくと、一緒に手をつないでいたみずきちゃん、「しらがの赤ちゃんが生まれるんじゃないの」というので私は思わず大笑いをしてしまった。本気でそう考えたようなの

で一層おかしさが増した。子どもたちの思考や発想の側面を垣間見る楽しさを味わった。

ただしくんがお風呂場で髪を切ってもらっていると、切った髪がただしくんのおちんちんの上にはとっ。それを見て驚いたようにただしくん。「ぼくおちちうえになっちゃった!」

よしみちゃん五歳、長いことトイレでがんばっていたが出てくると、「おかあさん、うんちがかたくてゆげが出そうやったわ!」

みやびちゃん(五歳)「おとなってお仕事行かないじゃないんでしょ? ねえおかあさん、先生はお仕事なにしてるんだらう。毎日、あそんでばかりいて、お仕事いく時間、あるのかな。おとななのにねえ……」

みつるくん(五歳)「先生、ぼくのおかあさん、忍者保育者」どうして?

みつるくん「だって、お皿なげるんだもん」

ころんで膝の下を打ったひでやくん(六歳)「人生には、痛いこともあるんだ」

じゅんきくん(五歳)「世界中で、みずぼうそうって、誰がさいしょになったわけ? その人、誰にうつされたわけ? なんかへんじゃん、そうでしょう?」

子どもは今が楽しければそれで十分、と思っているのか? 笑っている時、ほんとにいい顔になる。

『今の、この楽しさのために生まれてきた……』
と言わんばかりの見つめ



でも、見つめ尽くせない、いい顔になる。

笑いの効用

「笑い上手は生き方上手」ということば通り、人は笑うことによって心の緊張を解きほぐし、ストレスを解消する。また笑うと体の免疫力が活性化するということで、最近では病気の治療に落語などの笑いを取り入れ治療効果をあげている病院もあるときく。

笑えないのは、体や心がかたくなり、「揺り動かす」反応が出せなくなっているからだと言われる。腹式呼吸の効用と同じように体や心を笑いで揺らし、いやなことを消去させよう。子どもたちは、大人のようなおいしいものを食べたり、音楽を聴いたりなどのストレス解消法を持ち合わせない分、遊びに熱中すること、笑うことが最も効果的な癒しになる。笑いこそ健康のカンフル剤でもあることを肝に銘じたい。

笑いが起きる条件

『子どもの笑いは変わったか？』（村瀬学者、岩波新書）という本を読んでいたら、笑いとは何か？ という章の中で次のような興味深い記述があった。

「笑い」は、目の前で起こる「出来事」とそれを「見る人の立場」との「組み合わせ」でしか起こらない。まず「笑い」が起こるためには、そこにある何か「くずれる」変化が必要だ。ころぶとか、間違えるとか、失敗するとか、へまをするとか。そんな場面が「笑い」の説明に引っぱり出されてきたのは、そこに「型のくずれ」があったからだ。例えば赤ちゃんにひよつとこのような「顔くずし」をしてみせると「笑い」が採れる。しかし何か「くずれる」というだけでは「笑い」にはならない。知らないおっさんにそんなことされた赤ちゃんは、きつと泣き出すだろうから。

「くずれ」が「笑い」になるためには、もうひとつの条件がある。それは何か？ 笑う人の側の態勢、心の構え方だ。例えば入試に合格したこと、宝くじに当たったことが大笑いなのではない。そうではなくて、頭の中にまず「たぶん、合格しないだろうな、当たらないだろうな」という悲観的な予想がはじめにある。ところがこの悲観的な予想に反して「合格」「当たり」になった。ここで「大笑い」「ばか笑い」となる。何が起こったか？ 要するに一度失ったものを「もう一度手に入れた」ことになったわけだ。ここに「くずれのもどし」と呼ぶ「状況のひっくりかえし（逆転）」が見えてくる。実は、この「くずれのもどし」という「ひっくり返し」がないと起らないものだった。「くずれ」がくずればなしにならないで、どこかに「立ち直る」ことが意識されているということだ。——中略——

赤ちゃんは「顔くずし（ひよっとこ顔）」だけで笑うのではなく、その人がよく知っている顔に「もどる」と

いうことの子測があつて、笑うのだ。「笑い」というのは、このような「くずれ」と「もどし」の方向が逆転する「二つの運動」がうまく「組み合わせたとき」生じていたものだった。

三、四歳ぐらいになると、大人から注意されて笑う、とか、恥かしくて笑つたり、自分を笑うことができるようになるのだが、じつはそれだけ自分への洞察（予測と結果の組み合わせ）ができてのことだったかと……納得するものがあつた。

絵本やお話、あるいは日常生活の中の、どういう場面（状況）で子どもがよく笑うかを観察することで「子どもの笑い、その条件」を解くことができそうだ。今後の課題である。

生活にもっと笑いを

年長児たちと公園や原っぱによく散歩に行った。目的

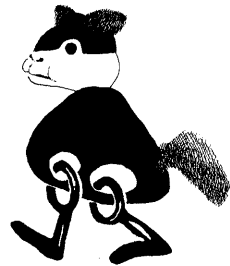
地に着くと子どもたちは、同じ遊びをしたい仲間と帰りの時間まで虫とりや基地ごっこを楽しんだ。ところが帰りを告げる約束の時間になっても仲々集まって来ないグループがいた。「もう帰りの時間なのに、いつまで遊んでいるつもり！」。私はおなじことばかり言っただけで帰るよう促したが、そのグループの子どもたちは、虫とりに夢中で少しも私のことばを聞き入れようとはしなかった。

そこで、私はある時いいことを思いついた。丁度園では、広告紙の二段重ね、三段重ねジェット機とばしが行っていた。その日も、相変わらず戻ろうとしない子どもたちの所に近づき、あらかじめ用意していたジェット機に、手紙をのせて彼らのもとにとばしたのである。

「あっ、手紙をのせた飛行機だ」「○○ちゃん、読んで！」。そこで一人が声を出して読み始める。「もう待ちきれません。先に帰ります。遅くなる人はこのジェット機にのって帰ってきて下さい。いまい」「うわっ大変だ。先生たち帰っちゃうよ！」。かくしてどの子ども血相を変

えて約束の所に戻ってきたのである。言われるよ、書かれたものを読むことは、年長児には何と効果があることか——。

生活の中にナンセンスをいっばい送りこむことで、保育者も子どもたちもいつのまにかしつかりと心をつなぎあえるようになるように思う。



子どもたちが少しも保育者の話を聞こうとしない時、かつては「お口はチャック、手はおひざ」など威圧的なことばで子どもたちを静めようとしたこともあった。しかし、群馬県に伝わる「ことばあそび」を知ってから、もう、どんなにしゃべりまくっていても、静かにさせる魔法をつかんだ私である。

「八釜やかま 四釜しかまで 十二釜かま。八やめろ 八やめろで十六だ。

四つ 四つ 四つ は 十二だね」。最後のしっ しっ
しっ……のところは声をおとし息だけで唱え言い終
わったら ニタツと笑う。これが極みつきである。まる
で魔法にかかったように静かになるから愉快である。
おやつや給食を「もつと」「もつと」と催促する子に
は、「根つきり、葉つきり、これつきり」と言ってみる
とニコツと笑ってあきらめてくれる。

「はい」ではなく「ああ」と返事した子には「あかに粟
飯、こうこに茶漬け、うまくななくても たんとおあが
り」と言ってみる。こんなうれしいことはないと言った
笑顔が見られる。

子どもは、ユーモアのある先生、よく笑う大人が大好
きだ。保育者の専門性のひとつに私はぜひとも「よく笑
うこと」「ユーモアのセンスがあること」を入れたいと
思っている。

子どもは「一人でトイレに行けたの」「ごはんをみー
んな食べられた」など、日常生活の実にささいなことを

喜びとして生きている。そんな小さな事こそ大事なのだ
と私は学ばせてもらった。

以前、中国と日本の合同調査でそれぞれの国の長寿の
方を調べてみたら「楽道家であること、好奇心いっぱい
の人であること」がその共通点だったと話に聞いたこと
があった。まさに、子ども性と重なる心の働きをもって
いるということである。そのような、子どもたちの笑い
が、乏しくなってしまうことは、生きる力、未来に夢を
ふくらませる力がしぼんでしまうことである。ほんとう
に子どもの笑いが少なくなっているのか？ まずはその
実態を何とか見える形に表し、子どもたちのSOSにしま
り応えたい。そう思っている私は、今、数人のなかまと一緒
に「子どもの笑いと自我の育ち」に関するアンケート調
査に踏み切った。次回は、その結果と、笑いがなぜ自我
の育ち（自発性と自律）につながるかを述べてみたいと
思っている。

（東京成徳短期大学）